

JASON W. MOORE

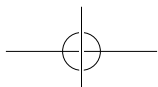
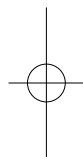
ジェイソン・W・ムーア



アメリカの環境史学者。ビンガムトン大学（ニューヨーク州立大学ビンガムトン校）社会学部教授。1994年にオレゴン大学で政治学と社会学の学士号を取得、97年にカリフォルニア州立大学サンタクルーズ校で歴史学の修士号、2007年にカリフォルニア州立大学バークレイ校で地理学の博士号を取得。スウェーデンの Lund 大学リサーチ・フェローなどを経たのち、ビンガムトン大学助教、准教授を経て現職。研究分野は、政治生態学、農業－食糧研究、歴史地理学、環境史、政治経済学など。

第8章

生命の 網のなかの 資本主義





『生命の網のなかの資本主義』

ジェイソン・W・ムーア 著

山下範久 監訳 山下範久／滝口良 訳

東洋経済新報社

資本主義の歴史と環境史を軸に、経済史、世界史、イマニュエル・ウォーラーステインに代表される世界システム分析、批判的人文地理学、マルクス主義フェミニズム、農業—食料開発研究など、著者の20年間にわたる省察・研究の集大成。地球温暖化、経済の金融化、中国の台頭、安価な食糧の終焉など、現代のさまざまな問題を、「世界=生態」という新しいパラダイムで解いていく画期的な試み。巻頭に「人新世の「資本論」」著者の斎藤幸平氏による解説がある。

——まず、本書のタイトルにある「生命の網 (Web of Life)」とはどういう意味ですか。

ジェイソン・W・ムーア (以下ムーア) 西洋の言葉で「nature (自然)」というと、誰もが、森や原野、鳥やミツバチ、土や小川などのことを思い浮かべます。私はその言葉自体が、西洋の近代、帝国主義のイデオロギー上のプロジェクト (もくろみ) だったと主張しています。換言すれば、「自然」という言葉自体が、単なる概念ではなく、権力を得るための戦略であり、利益を出すための手段であるということです。

この本のタイトルの中に「Web of Life」という言葉を入れたのは、読者に、自分の周りの世界を、今までは異なった見方でみてほしいからです。世界を、人間と人間以外の自然という相互関係だけではなく、さまざまな組織——家族も、工場も、金融センターも、帝国も——「生命の網」の中に含まれていることを理解してほしい。それらは「生命の網」の中ではそれぞれ独特ですが、「生命の網」から分離されているわけではありません。とても重要なことなのですが、西洋で支配的な文明観、つまり、一方に人間、もう一方に自然を置いて両者を対比させる考え方は、この世界をそのまま表した世界観ではありません。こうしたものの見方は、西洋が行う文明化計画にあらかじめ組み込まれています。

例えば、ヨーロッパの帝国は一四九二年以降、アメリカの先住民を、人間としてではなく、

野蛮人、つまり自然の一部として分類しています。ヨーロッパの人の生活が良くなればなるほど、アメリカ人の労働は安価になり、文化的な意味でも価値が低いとされました。

——いま、人類が地質や生態系に影響を与えるようになった時代として「人新世 (Anthropocene)」という言葉がよく使われるようになりました。それに対してあなたは、「人新世」だと「人間」対「人間以外の自然」を対峙させる二元論になってしまふ。問題なのは資本主義だから「資本新世 (Capitalocene)」という言葉を使うべきだと主張します。「資本新世」という言葉はあなたがつくったのでしょうか。

ムーア 「資本新世」という言葉自体はスウェーデンのマルクス主義者であるアンドレアス・マルムがつくったものです。ただ、マルムがこの言葉を「資本主義に化石燃料を加えたもの」として使ったのに対して、私の使う「資本新世」は、資本主義を経済システムとして捉えてはいけけない、と読者に知ってもらうために使いました。資本主義をエコロジー (生態学) として捉えるために元のコンセプトを発展させた言葉です。

私は本の冒頭で、読者に対して、資本主義や資本主義の歴史について考えるとき、まるで自然の問題を考えるときのように考えてほしいと呼びかけています。資本主義を「生命の網」から分離しないで、資本主義がいかにして、「生命の網」の中で変化を生んでいる

かを示し、資本主義はそういう変化の産物でもあることを示したい。そして、資本主義が引き起こした変化の中で、最も重要なものが気候変動なのです。

なぜ今、マルクスに回帰するのか？

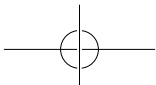
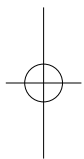
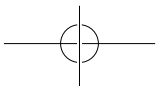
——近年、資本主義それ自体の行き詰まりが語られ、マルクスの著作が再評価されてきていますが、その根本的な理由は何だと思えますか。

ムーア マルクスへの回帰が起こっている理由はいくつかあります。一つは多くのマルクス主義者が言っていることですが、『資本論』に書かれている資本モデルが、一五〇年前にマルクスが書いていた当時よりも、実際に今存在している、グローバル化された資本主義に対して、より大きな適用性と妥当性があることです。

私からみると、マルクスは「生命の網」にある諸力の関係に執拗なまでに好奇心を抱いていた人です。私が強調したいポイントは、マルクスやエンゲルスが唱えている唯物史観の基礎をなす歴史観に回帰すると、最初に驚くべきことを言っている、ということなのです。

それは、「人類の歴史は、人の身体がどのようにできているか、そのありのままの状態、人類の長い歴史を通して、そのありのままの状態が環境によってどのように変容・変異

15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



(ここが重要です)させられてきたかを見ることから始まる」という内容です。これこそが、私が『生命の網のなかの資本主義』の中で、「環境―制作の弁証法」と呼んでいるものです。

――アフリカの草原に暮らし続けた人たちの視力が八・〇だったりするのも、遠くにいる野生動物を見つけないと命にかかわる環境だったからですね。たしかに、とても長い時間のなかで考えると、人間の身体の特徴も時代や地域によって変わっていきます。

ムーア これはまた、環境を単にそこにあるものとして捉えるという立場から、環境は社会によってつくられるものとする立場へと変わることです。環境をつくる行為は、人間の組織の性質を変えます。マルクスとエンゲルスは、「生命の網」の中における階級社会を理解する方法を示してくれました。さらに、近代性の本当の恩恵を犠牲にすることなく、階級社会を超える可能性も示したのです。

――あなた自身がマルクスの著作から学んだことで、今一番注目すべき点はどこでしょうか。

ムーア 一つはまさに今、説明したことです。マルクス主義者は、決まってこの部分を無視します。私の仲間の一人、ジョン・ベラミー・フォスター（アメリカの社会学者。専門は、

マルクス主義政治経済学、環境社会学）は、この無視された部分に注目し、議論の道を開き、マルクスを再評価しました。彼の著書である、『マルクスのエコロジー (Marx's Ecology: Materialism and Nature)』（つばし書房）はこの分野の草分け的な本で、皆に読むように薦めています。私はその洞察をさらに異なる方向に進めました。

例えば、マルクスが常に強調していたのは、人間の社会的関係の二重性と呼ばれるものです。一方に社会があり、もう一方に自然がある。マルクスからみると、それを弁証法的に考えることが階級社会を解く糸口となる。もっといえば、私が『生命の網のなかの資本主義』で説明している、階級闘争の原動力や、資本主義が好景気や経済危機を経る過程、さらに、資本主義が資本蓄積に必要な条件を満たすべく、帝国主義の時代や政治構造の再編を経験したことを説明する糸口ともなります。

我々の社会が階級社会になっっているという主張については、私はマルクスに賛同します。ただ、ほとんどのマルクス主義者が認めてきた範囲よりも、ずっと広範囲に考えています。これは気候危機を考える上でも非常に重要です。なぜなら、あらゆる種類の生命の網は、資本主義の下では、利潤追求のために利用されるからです。これには、昔から慣例的に理解されているような、プロレタリアート（無産階級）だけでなく、女性、自然界、植民地

の人々によって行われる無償労働も含まれます。

こう考えることで、階級社会や労働階級に対して、従来のマルクス主義者や環境保護主義者とは異なる見方が出てきます。その見方とは、資本主義が繁栄するのは、自然を破壊することによってではなく、生命の網を無償で、あるいは低コストで働かせることによつてであるということです。

これが、人種差別や性差別でみられるように、特定のグループの政治的、文化的な評価を下げることに繋がるのです。それらが、剰余価値を搾取する、階級の力を盤石なものにするのです。

このように、マルクスの卓越した洞察力を、現在の前代未聞の地球危機の時代に取り込むことができるのです。

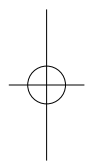
自然vs.社会という見方を考え直す

——あなたは、この本で何度も、Society (「大文字」の社会＝自然抜きの人間) と、Nature (「大文字」の自然＝人間抜き環境) というデカルト主義的な二元論からの脱却を目指すことを語っていますね。

ムーア それこそ『生命の網のなかの資本主義』の核心です。そして、私の主張で最も誤解されている部分でもあります。誤解されている理由は、複雑であるからではなく、ブルジョアによる支配によって我々が現実をあり得ない視点でみているからです。我々は「生命の網」抜きで金融化を理解することができるとか、一方では、人間抜きの自然が存在すると思ひ込んでいます。しかしもちろん人間は、考えられる限り最も深く、根本的な意味で、「生命の網」の一部です。

この本が難解に思えるとしたら、それは内容が複雑であるからではなく、すべてのことを一方で自然、もう一方で社会というふうに分けて定義する、ブルジョア的イデオロギーからいまだに脱けだせないからです。

イデオロギー的に言うと、資本主義の発明の一つは、世界を最初から文明化された世界と野蛮の世界、キリスト教と非キリスト教に分離したことです。これは資本主義の歴史を通して、何度も形を変えて繰り返された、イデオロギー上の分離です。例えば、第二次世界大戦後、一九四九年にトルーマン大統領は有名なスピーチで、世界の人口の八〇パーセントは「未開発」である、つまり文明化されていないと言ひ放ちました。それは社会や文明には含まれないということです。アメリカの発展を辿ることでは文明の域に到達



15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

するかもしれませんが、まだ到達していないということです。
 このような主張がいかに組み立てられ、効果的な言葉で喧伝けんでんされたかをみると、昔のキリスト教化、文明化プロジェクトの時代と、とてつもなく似ていることに気づきます。本質において、これらのプロジェクトが目指したことは、資本主義を前進させること、とりわけ安価な労働を前進させるのに必要な安価な自然を確保することでした。利潤率を上げるべく、労働を自然の領域、とりわけ女性の無償労働をその領域に入れようとしたのです。本書の目的の一つは、政府や国際金融センターだけでなく、ほとんどのマルクス主義者や環境保護主義者たちが共有している、自然vs.社会という従来の方見方を捨ててもらうことです。このような見方は、人間の労働を含むすべての生命の網を営利目的に変えようとする、支配者たちの考え方なのです。

私が本書の序章で強調したかったのは、資本主義は経済のシステムではないし、社会のシステムでもない、ということでした。それは「自然の組織化の様式」です。プロジェクトとしての資本主義と、歴史的プロセスとしての資本主義は区別しなければなりません。まず、資本主義者や帝国による、長期にわたるプロジェクトがあります。そのプロジェクトは私がデカルト主義的二元論と呼ぶ、社会と自然を分離するイメージで、世界を改造でき

15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

ます。しかし、現実はずっと違います。人類が折に触れ、生命の網と密接に繋がっています。資本主義の歴史のプロセスがあります。それが大衆の抵抗や反乱や階級の対立を引き起こしていました。それは現在の「気候正義」を求める闘いに、明らかに繋がっています。

資本主義と農業の密接な関係について

—— 農業の資本化について、あなたは「急速に進んだ資本化は驚くべき錬金術によって可能となったものである。その錬金術とは、石油と天然ガスを食糧へと変えるというものである」と書いています。錬金術とはどういうことでしょうか。

ムーア 資本主義的農業はここ五〇〇年の間にダイナミックに変化してきました。それはとてもわかりやすいモデルです。資本家が資本を蓄積するシステムの成否は、できる限り少ない労働で、できる限り多くの食糧を産出する農業モデルの構築にかかっています。このモデルは今、裕福な国のあちこちで見受けられます。非常に少数の農民が、大量の食糧を産出しています。

『生命の網のなかの資本主義』では、何世紀にもわたって起こった農業革命モデルについ

て論じていますが、端的に言うと、そのモデルが改革されるたびに、農業モデルは地理的に拡大し、新しいフロンティアに移動しなければなりませんでした。一六世紀、一七世紀にまずオランダ、イギリス。それからアメリカが一九〜二〇世紀にかけて大きなムーブメントを起こしましたが、それはもう終わっています。私が「安価な食糧モデル」と呼ぶものとの関連で言うと、今やそのフロンティアは限界に達し、我々はその終焉を目の当たりにしているのです。

農業システムが、より少ない労働でより多くの食糧を産出することによって、安価な食糧が可能になります。すべての人に安価であるわけではありませんが、世界中の工場労働者階級の人には安価なのです。考えてみると、この二世紀にわたって起きたひどい飢餓が小作人社会を苦しめてきた理由の一つは、(資本主義では)小作人は餓死してもいいとされたからです。でも工場労働者はそういうわけにはいきません。もし労働者が工場に行くのをやめたら、資本蓄積のシステム全体がきしみながら停止してしまいます。

農業モデルはとても重要なものです。安価な食糧と安価な労働は密接に繋がっているからです。偉大なる産業革命は、労働者への安価な食糧供給があったからこそ成ったのです。工場労働者への食糧が高価になることが暴動を引き起こすのです。フランス革命やロ

シア革命からアラブの春までをみれば、食糧が政治的安定に重要なことがわかるはずです。

気候変動について言うと、地球温暖化が農業の生産性を抑制していることを示す、すぐれた研究があります。二〇二二年、「ネイチャー・クライメイト・チェンジ」に発表されたリポートによれば、七年分の農業生産量が、気候変動という理由だけで失われたということです。資本主義は生命の網を生み出しますが、生命の網によって資本主義も生み出されるという弁証法を忘れてはなりません。資本主義は気候変動を生み出しましたが、現在の気候変動は、資本主義的農業の限界を生み出しています。

——スーパージェン(除草剤の効果がない雑草)について述べているところで、「[資本による]自然の諸プロセスの「飼育慣らし」が進めば進むほど自然はますます制御不能となり、このことはますます破滅的な影響をもたらす」と書かれています。これは新型コロナウイルスの感染爆発にも当てはまるのではないのでしょうか。

ムーア それは疑いようがありません。私はこの公衆衛生の問題を「負の価値」の主な形態の一つと考えます。資本主義がいかにして生活を変えてしまうか、という好例です。実際、新型コロナウイルスはビジネスを制限し始めています。

15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

パンデミックの問題は、大規模な環境の変化、経済や政治の変化に密接に関係しています。このパンデミックに関して我々が目の当たりにしているのは、新自由主義的資本主義の破綻と世界中の環境変化の直接の結果です。ただ、そのことに驚いてはいけません。資本主義の起源は、西欧では一四世紀にあります。気候変動、農業―生態系の枯渇、民衆の暴動に繋がった病気、つまりペストの時代です。それが資本主義の台頭に繋がりました。ですから、パンデミックは自然に湧き出てくるのではないことを念頭に置いておかなければなりません。パンデミックは、人間が環境をつくる活動や、交易や移住を通して互いに繋がりが、大規模なレベルで景観や森林や野原を変容させることで、形になって出現するのです。

資本主義では気候変動を解決できない

——これまで気候変動について何回か言及しましたが、「資本主義が気候変動に対して何らかの有効な仕方で対処できるとおよそ考えられない」とも書いていますね。その理由を説明してください。

ムーア 最近（二〇二二年九月）報道されたニュースで、良い例があります。スイスの二酸化炭素回収スタートアップ企業、クライムワークスが進めるプロジェクトは、地熱エネルギーを利用して大気中の二酸化炭素を除去し、アイスランドの地下に貯留するもので、機械を使って炭素を貯留する「直接空気回収（DAC）」と呼ばれる技術です。これは年間四〇〇〇トンの二酸化炭素を除去します。この量は一年間に排出される二酸化炭素の三分に当たります。これを見ると、なぜこういう工場が何万と建設されていないのか、と疑問に思います。なぜ、資本主義が誇る費用効率性が、二酸化炭素除去テクノロジーと連携していないのでしょうか。その答えは、「利益にならないから」です。

これは、明らかに資本主義のロジックの枠内で捉えられた答えです。しかし、我々はどうして資本主義のロジックが機能しないのか理解しなければなりません。それには二つの力がかかわっています。

一つは安価な自然の終焉と共に起きたことで、資本主義の力の源泉になるものが、今それ自体に敵対していることです。資本家は、利益を出すために再投資することができますが、それよりも資本そのものがさらに富を生み出すようになっていっています。

これはマルクス主義者や新古典派経済学者たちが扱ってきた典型的な経済問題で、投資機会の数が縮小しているのに投資機会を求めている大量の資金が増えているという問題で

15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
す。これは余剰資本の問題で、歴史的にはフロンティアを動かしたり、フロンティアを生かすテクノロジーを開発することによって解決してきました。

植民地のように陸地にあるフロンティアではありませんが、石炭と石油は地下にあるフロンティアとして大きな力をもっています。例えば、石油価格が一バレル当たり一〇〇ドルではなく、五ドルであるとなると、多くの投資の可能性が出てきます。コストがはるかに低いからです。

現在、中国を例外としてフロンティアは閉じられていて、それが産業から金融への資本のシフトに繋がっています。私が強調したいのは、大規模な産業投資がない金融化は、資本主義の歴史では異例であり、その理由はフロンティアの終焉であるということです。

二つ目は、これはフロンティアが徐々に閉じていることに関係があるということです。この状態で、世界経済に何が起きるのでしょうか。安価な自然の意味のあるフロンティア、つまり、私が四つの安価物と呼んでいるもの——労働力、食糧、エネルギー、原材料——がない状態で、起きることは再分配への方向転換ですが、金持ちから貧しい人への再分配ではなく、逆再分配のロビン・フッドです。つまり、中流階級、労働者階級から、大金持ちへの再分配です。

今これこそ、我々が世界中で目の当たりにしていることです。つまり、そもそも新しいフロンティアは大きな規模では存在しませんが、それに移行するのではなく、トップパーセントの人々がますます資本を蓄積するような再分配です。そのやり方を彼らは知っているのです。

「対価の支払われないはたらき」が資本主義を支えている

——「資本主義とは対価の支払われないはたらきのシステムでもあり、このシステムは対価の支払われないはたらき／エネルギーの流れをより多く収奪するために人間の才知を動員することで成り立っている」と書いていますが、「対価の支払われないはたらき」について説明してください。

ムーア 日本語では韻を踏まないかもしれませんが、すべての「プロレタリアート (proletariat)」（賃金労働者）に密接に関係しているのが「フェミタリアート (fematarial)」の「対価の支払われないはたらき」です。これは feminine (女性の) からできた言葉です。家族の世話、料理、掃除、子育てなど、そういうことをしているすべての女性は、対価の支払われないフェミタリアートです。もちろん賃金をもらって働いている女性もいること

を強調しますが。この二つの異なるコンセプトはお互いに繋がっています。

また、これとは別に「バイオタリアート (bioteriat)」は biological proletariat (生物学プロレタリアート) のことです。「プロレタリアート」が「人間を資本のためのはたらきに供せしめること」であるのに対し、「バイオタリアート」は「人間以外の生命を資本のはたらきに供せしめること」です。これらの考え方は、いくつかの点で、マルクスが一九世紀初期のイギリスのプロレタリアートについて述べていることに回帰します。マルクスはその状況を「ベールで隠された賃金奴隷状態」と呼びました。

さらにマルクスは、この賃金奴隷状態は、アメリカ南部、キューバ、西インド諸島では実際の奴隷に依存していると言いました。マルクスは、賃金が支払われる仕事や支払われない仕事など異なる形の仕事を比較してその関係を引き合いに出しています。つまり一つの仕事だけを独立して考えることはできないということです。

あなたの質問で強調された「対価の支払われない」というのは、とても重要なことです。工場やオフィスで行われているいわゆる経済搾取のどの行為よりもより大きな収奪行為が、女性や自然や植民地に対しての対価の支払われない仕事です。収奪というのは、資本主義は一つの経済システム以上のものであるという意味です。支配や法律や政治の文化という

経済外のシステムが、女性や有色人種や被植民者や、生命の網全体の従属的地位を強化しているのです。

——また「資本主義の基本的問題は、資本が必要とする安価な自然の量が、資本が確保できる安価な自然の量よりも速く増大してしまう傾向があるということである。このことはとうの昔にマルクスが認識していたことであつた」と書いています。マルクスには未来が見えていたのでしょうか。

ムーア マルクスが言っていることがすべて正しいとは言いたくありませんが、資本主義産業のまさにそのダイナミズムが原材料やエネルギーの過少生産、そして最終的に資本蓄積の長期波動の最後に現れる労働の過少生産の状況を生み出すという、驚くべき洞察をマルクスはもっていました。この典型的な例は、一九六〇年代、七〇年代の世界規模の経済危機でしょう。その時期の日本は、七〇年代初期の石油危機の影響を受けたものの、立派にやっています。

しかしポイントは、産業の大幅な拡大は、安価な自然を高価な自然にしてしまうことです。一九世紀後半の「大不況」が良い例です。四つの安価物である労働力、食糧、エネルギー、原材料の価格が安価でなくなると、一連の政治的アクションや帝国主義的アクション

ンが結果として起きました。これが帝国主義の大きな問題です。

歴史的にみると、今日に至るまで帝国主義の役割は安価な自然——安価な食糧、安価な労働力、安価なエネルギー、安価な原材料——を確保することです。もちろんそれはすべての人に対して安価というわけではありません。それは資本主義による損失や損害を世界中の労働者階級、特にグローバルサウス（北半球の先進国と対比して使われる、南半球に多いアジアやアフリカなどの新興国・途上国の総称）の労働者階級に再配分する行為です。

高価な自然は、資本主義の避けられない長期的な特徴であり、その解決法は、フロンティアに向かうことです。つまり新しい帝国主義を意味するのです。

——そして、資本が特定の地域というフロンティアではなく、「金融」に向かったのですね。

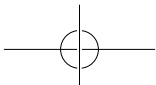
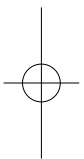
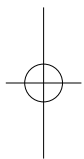
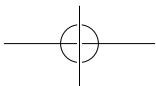
ムーア 金融は非常に重要です。实体经济、消費財、サービスなどに、利益が出るように投資することがますます困難になるにつれ、資本は生産から金融に移ります。消費財の生産やサービスよりもっと当てになる、利益の出る機会が多いという明白な理由でそうなるのです。

これはまた、残念ながら環境保護主義者たちが口にするのではない、もう一つのネオリ

ベラルな資本主義とも繋がります。それは世界中の資本蓄積の恒久的軍事化です。これはもちろんアメリカ主導で二〇〇一年以来の終わらなき対テロ戦争によって強調されました。ジョヴァンニ・アリギ（イタリア出身の歴史社会学者）が指摘したように、生産において利益を得る機会が減少すると、世界の列強は軍事拡大を行う傾向があります。それを実行するには、とてつもない額のお金をどこから借り入れなければなりません。

いま我々が目の当たりにしているのは、地球生命の金融化ですが、それと世界、特にグローバルサウスのかかなりの部分の軍事化が同時に起こっています。アメリカは七〇国ほどで軍事活動を続けており、米軍基地は世界中の七〇〇以上の場所にあります。金融化と軍事化が繋がっているだけではありません。この二つは「生命の網」とも密接な関係があります。ブラウン大学の研究によれば、ペンタゴン（米国防総省）は組織として世界で最も多くの温室効果ガスを排出しています。

私がいかに繋がっていると喋っていると喋っているのは、それらがまるで繋がっていないように扱われることが多いからです。『生命の網のなかの資本主義』はそういう「ディスコネクション（繋がらないこと）」に対する解毒剤です。



問題は「安価なゴミの終わり」

——あなたは二一世紀最大の問題として「安価な資源の終わりではなく、むしろ安価なゴミの終わりのほうが大きな問題として立ち現れてこよう」とも言っていますが、これはどういうことでしょうか。

ムーア 資本主義の、地球上の生命の囲い込みは我々を汚染しているからです。その代償は今、直接的な、差し迫った形で、我々に戻ってきています。その一つの形はもちろん、資本主義が、温室効果ガス排出の安価な「ゴミ捨て場」として、大気の囲い込みをしていることです。我々が目の当たりにしているもう一つの例は、我々の身体が、後期資本主義の最も危険な汚染物質の、歩くゴミ捨て場に変わり果てたことです。重金属やプラスチック、ダイオキシンやベンゼン……。先日、私も、プラスチックに含まれるフタル酸エステルが原因で、年間一〇万人が早死にしていると報道されたばかりです。

私が著書で指摘しているのは、安価なゴミの終わりはそれがコストに影響していない間はうまくいくということです。今はそれがコストに影響しています。マスク報道によると、プラスチック汚染だけで、失われた労働生産性は年間五〇〇億ドルという試算が出ています。重金属の話をしているではありません。いろいろな形になって表れている、気

候変動の致命的なインパクトの話をしているのでもありません。公衆衛生問題と、いわゆる自然災害（とはいえ、「自然」ではまったくありません）の増大で我々が目の当たりにしているのは、安価なゴミの終わりに対して、ツケが回ってきているということなのです。

——日本では核廃棄物が問題になっていますが、それもその最たる例ですか。

ムーア それは恐ろしい例ではないでしょうか。核技術というのは、極めて中央集権化されたテクノロジの一つで、発電の最も非民主的な形の一つです。病的で、危険で、長期的な影響は恐ろしく、費用がかかります。核エネルギーというのは、資本主義の病理の最たる例です。

コミュニズムは誤解されている

——『生命の網のなかの資本主義』日本語版あとがきに「コミュニズムの地平は近づいている」とあります。現在我々が直面している諸問題を解決するには、資本主義の改革では難しく、やはり「コミュニズム」が必要であるということでしょうか。

ムーア コミュニズムは誤解されています。西洋では、コミュニズムはソ連や中国で起きたこととイコールであると信じている急進派がいます。それについて一言いたたいです。

日本語版のあとがきに書いたコミニズムはマルクスとエンゲルスが概念化したものについてですが、それは社会革命という政治形態とはまったく関係がありません。

マルクスらはコミニズムを、実際に存在していた階級闘争の歴史的なムーブメントと説明しています。私に言わせるとそのムーブメントとは、この地球に労働者階級が現れたことです。賃金労働者だけではなく、先ほども言ったフェミタリアートやバイオタリアートも含めたプロレタリアートの出現です。この労働者階級の正義はフェミニストの正義であると同時に地球の正義でもあることを理解しなければなりません。

コミニズムは特定の政治構造のビジョンを意味しないと云っているマルクスとエンゲルスにとって、それは今日の世界で次々と起きていく階級闘争そのものを意味します。もちろん、私の恩師の一人であるイマニエル・ウォーラーstein（アメリカの社会学者、経済史家。巨視的な観点から世界の歴史と社会全体を「単一のシステム」と捉える「世界システム論」を提唱・確立したことで知られる）は、死の間際に「階級闘争は決定的に重要である。社会主義への移行の可能性は五〇パーセントある。五分五分だ」という言葉を残しました。

マルクス主義についても非マルクス主義についても、共産主義についても非共産主義についても好きなことが言えますが、実際の歴史を理解したければ、それは乱雑で取り散ら

かったものとしか言いようがありません。啓蒙への真の道を提供してくれるようなレシピ本はありません。マルクスは、「科学に王道なし」と言いましたが、「社会主義に王道なし」と言っていたかもしれない。紆余曲折だらけの道で、終わりのない学びの道です。

この旅が成功する望みがあるとすれば、それが成功するには、賃金労働者のことだけでなく、対価の支払われる仕事、対価の支払われない仕事、経済学、帝国や文化など、いろいろな繋がりが、生命の網のなかの資本主義の、網全体が整合していることを理解しなければなりません。

『生命の網のなかの資本主義』は対話への招待状です。気候変動の時代のチャレンジをよりはつきりとみる方法として、過去を再考する招待状という意味です。

(二〇二二年一〇月一三日インタビュー)

